

大谷大学真宗総合研究所

研究所報

No. 17

1987. 6. 30.

目次	研究余瀝	1
	昭和62年度「指定研究」 研究計画紹介	3
	昭和61年度「指定研究」 研究経過報告	4
	昭和61年度「一般研究」 研究概要	8
	昭和62年度「一般研究」 研究目的紹介	14

研究余瀝

真宗総合研究所所長 渡辺貞磨
教授・国文学

研究は、それ自体が一種の生き物であるように、私には、時どき思えるのだ。今まで、持ちこまれることのなかったデータをインプットすることで、あたかも、異なる肥料が与えられてその色を変える紫陽花のように、当面の研究の対象は様相を一変させてしまうことがあるからだ。

夕されば野辺の秋風身にしみて

うづらなくなり深草の里

これは、平安末から鎌倉初期にかけての大歌人、藤原俊成が、自らの代表作として推したということで、あまねく知られている歌である。そしてまた、同時代、歌壇の一方の先達であった俊恵が、その第三句目「身にしみて」が主情的でありすぎる故に「いみじう無念」とであると批判したということで、古来、歌学者たちに注目され続けてきた歌でもある。そしてさらにまた、この歌は、それが作られてよりこのかた、おそらくは、一度も、仏教文学的に解釈されることのなかった作品である。

ところでこの歌は、従来指摘されている如く、『伊勢物語』に載せられた、(男)「年を経て住み来し里をいで、去なばいとど深草野とやなりなむ」、かえし(女)「野とならばうづらとなりてなき居らむかりにだにやは君は来ざらむ」という贈答歌を念頭においている。(同じ贈答歌は『古今集』にも見られるが、俊成が強く意識したのは『伊勢物語』の方であったに違いない)。うづらになった私を狩りに、あなたがかりそめにもやって来るのを、私は待とう、——そこに哀切きわまりない女の心情を見る。

だが、女がうづらになるということは、その昔の常識からすれば、畜生道に墮ちる

ということの意味していたはずである。これは、決して私だけの強引な理解などではない。鎌倉時代の仏教説話集『閑居友』の作者もまた、『伊勢物語』のうずらの歌を示しつつ、畜生道に堕ちてまで愛執を遂げようとする、女の妄念の深さに、いたましい思いをよせている。

とすれば、俊成が「うづらなくなり深草の里」と詠むとき、そのうずらは、彼にとっては、愛執故に畜生道に堕ちてしまった女のことでなければなるまい。その上、彼はすぐれた仏教者でもあった。その俊成が当然読んでいたにちがいない『往生要集』には、「六道の苦相・不浄を觀ずることは、衆生の苦を共感する、大乘の菩薩行である」と示されている。これらのデータをインプットしよう。

「野辺の秋風」が「身にしみ」るのは、その風がうずらのなき声を運んでくるからであっただろう。その時俊成は、うずらの女の畜生道での苦を、「身にしみて」共感していたのではなかったか。それが、自らの菩薩行の実践としての歌であるが故に、文学を超えた仏教という視座から、俊成はこれを自身の代表作としたのではなかったか。そして俊恵は、ことによれば、見当ちがいの批判を、文学の立場からしていたのではなかったか。

かくして、この俊成の「自讃歌」は、仏教文学としての貌を見せはじめる。しかし、私がインプットしたデータは、決して新発見・新出といったような類のものではなかった。誰もが知っている常識を、そこに持ちこんだにすぎない。私が、そうした事柄をデータとし得たのは、愛執をむしろ美德として謳歌する青春の特権を、私がもはや完全に失ってしまっているからなのであろうか。

『研究所紀要』第4号が刊行されました。内容は以下に示すとおりです。ご希望の方は研究所までご連絡下さい。

注維摩經の異本について……………	木村宣彰
真下飛泉研究—京都師範附属小学校時代の真下飛泉—……………	佐々木正昭
子ども、保育、保育者養成の現状と課題	
—本学幼児教育科卒業生の実態調査の結果から—……………	松村尚子
中世本願寺の寺院組織と身分制……………	片山山子
『教行信証』公開の歴史—金子大栄師を中心として—……………	嶋山正信
『教行信証師資發覆鈔』について……………	金信昌樹

昭和六十年度研究所報告
執筆者紹介

英訳『教行信証』の諸問題……………	安富信哉
Annotated Translation of the <i>Ssu-chiao-i, chüan 2</i> ……………	Robert F. Rhodes
Dating the <i>Hsiang-fa chueh-i ching</i> ……………	Whalen W. Lai
The Intent and Structure of Yogācāra Philosophy: —Its Relevance for Modern Religious Thought—……………	John P. Keenan
<i>Shinjin</i> : More than "Faith"?……………	John Ross Carter

(別冊)

教行信証の基礎的研究に関する報告……………	幡谷明
『教行信証』関係雑誌論文目録……………	藤嶽明信
『教行信証』科文集……………	畑辺初代
『教行信証』化身土巻末巻校異……………	佐藤智水

なお、別冊につきましては、目下校正中で、まもなくお手もとにお届けできる予定です。

大谷大学真宗総合研究所

昭和62年度「指定研究」研究計画紹介

昭和62年度の「指定研究」研究事業計画が、研究所委員会で審議され、決定された。

「真宗学事研究」では、チーフが名畑崇教授となるなど、研究組織に異動があった。これは、近代の資料の整理に重点が置かれたためである。

「海外仏教研究」では、嘱託研究員・研究補助員に異動があった。これは、文献資料の収集と検討について、ドイツ語圏のものおよび東南アジアのものに加えて、ソヴィエトのものをも視野に入れることになったためである。また、1960年以降のビブリオグラフィの作成が精力的に推進されることになった。

「西藏文献研究」では、蔵外文献中の稀観本の刊行に向けて、編集作業が行なわれる。

「大蔵経学術用語研究」では、チーフが鍵主良敬教授にかわるなど、組織に異動があった。これは研究課題が今年度より新たに設定されたことにともなうものである。

特定研究・委託研究ともに具体的な作業計画が立てられており、研究課題への実り多き取り組みが期待される。

研 究 名	研究課題及び研究組織
真宗学事研究 (特定研究 代表 学長 北西 弘)	研究課題 「大谷大学三百年史編纂・それに関する文献資料の研究」 研究員 名畑 崇 (チーフ・教授・日本仏教史学) 幡谷 明 (教授・真宗学) 大竹 鑑 (教授・教育学) 鈴木幹雄 (教授・倫理学) 木場明志 (専任講師・国史学) 草野顕之 (専任講師・日本仏教史学) 渡辺貞麿 (所長・教授・国文学) 市橋弘道 (主事・助教・英語) 嘱託研究員 桜部 建 (元大谷大学教授・本学非常勤講師・仏教学) 松本 専成 (滋賀県立玉川高校教諭) 井上 円 (本学非常勤講師・真宗学) 研究補助員 三本昌之 (修士課程修了生・日本仏教史学) 深田虎雄、綿谷 勝信 (以上博士課程修了生・日本仏教史学) 熊木 剛 (博士課程修了生・真宗学) 宮崎健司、鳥越正道、前田一郎、判田哲也、江城忠雄 (以上博士課程) 山口昭彦 (修士課程修了生・国史学)
海外仏教研究 (特定研究 代表 学長 北西 弘)	研究課題 「海外における仏教研究に関する方法論の研究および文献資料の収集」 研究員 長崎法潤 (チーフ・教授・インド学) 岩田慶治 (教授・社会学) 多田 稔 (教授・英文学) 箕浦恵了 (教授・西洋哲学) 安富信哉 (助教授・真宗学) 宮下晴輝 (専任講師・仏教学) 渡辺 貞麿 (所長・教授・国文学) 市橋弘道 (主事・助教授・英語) 嘱託研究員 今枝由郎 (フランス国立中央科学研究所研究員) 大河内了義 (神戸大学教授) リノ・ベリーニ (本学非常勤講師・日本仏教史学) ジャン・ノエル・ロベール (フランス国立中央科学研究所主任研究員・高等学院講師) 彦坂 周 (アジア文化研究所長・インド、マドラス) ロバート・ローズ (本学非常勤講師・仏教学) 浅野玄誠 (本学非常勤講師・インド学) 本田パトリシア (修士課程修了生・真宗学・在北米) 研究補助員 橋本篤司、畑辺初代、加藤 均 (以上博士課程)
西藏文献研究 (委託研究 代表 学長 北西 弘)	研究課題 「大谷大学所蔵の北京版西藏大蔵経及び蔵外文献の文献研究」 研究員 小川一乗 (チーフ・教授・仏教学) 片野道雄 (助教授・仏教学) 小谷信千代、白館戒雲 (以上専任講師・仏教学) 研究補助員 松田和信 (本学非常勤講師・仏教学) アレクサンダー・ノートン (元客員研究員)
大蔵経学術用語研究 (委託研究 代表 学長 北西 弘)	研究課題 「日本撰述の俱舍論関係典籍における学術用語の研究」 研究員 鍵主良敬 (チーフ・教授・仏教学) 福島光哉、古田和弘 (以上教授・仏教学) 木村宣彰、一色順心 (以上専任講師・仏教学) 研究補助員 兵藤一夫、山野俊郎 (以上本学非常勤講師・仏教学) 萩原晃俊 (博士課程)

昭和61年度

「指定研究」研究経過報告

真宗学事研究

「大谷大学300年史編纂・それに関する文献資料の研究」

研究員・チーフ 幡谷 明

「真宗学事研究」は、昭和六十年度より「大谷大学三百年史編纂・それに関する文献資料の研究」との課題を与えられ、大学史編纂を目指して、近世以降の学事関係資料の収集・整理等の作業を進める事となった。

昭和六十年度に於いては、従来の資料研究を継続しながら、それらを再度点検し、大学史編纂の準備のために整備することを主眼とした。その作業の基本的視点としては、大学史編纂に必要な資料の調査・収集と、翻刻ないし複写等の作業による資料利用の利便化、更に基礎資料の読解を通して従来の学事研究の批判的検討を行う中で、新たな大学史観を摸索することの三点であった。具体的には〈資料整備〉、〈資料検討会〉及び〈研究会〉の三分野で様々な作業が行なわれ、成果を得た。しかし、〈資料整備〉に於いては、従来からの継続作業が主要であったこともあり、近世資料の収集・整備作業の進捗に比べて、近代以降の資料収集・整理等の作業の立ち遅れが指摘されていた。

昭和六十一年度に於いては、上記のような作業の進捗状況を踏まえ、近世学事関係資料の収集・整理等と、近代以降の学事関係資料の収集・整理等の二つを、〈資料整備〉の柱とした。このうち近代以降の作業の立ち遅れは、宗内・宗外資料の積極的な収集・整理に努めたことにより克服しつつある。又、従来から継続されて来た作業の蓄積は、その幾つかを公表する事が出来た。

〈資料検討会〉は、学事研究にとって不可欠の作業である。基礎資料の読解は、資料への理解を深めると共に、その資料の価値や、そこから触発される問題が指摘され論議されることにより、資料収集・整理等の作業上の反省や、学事研究の方法論上の考察を深めることともなる。今年度に於いては、二回の資料検討会がもたれ、幾つかの示唆に富む報告がなされた。

〈研究会〉は、研究員各自がそれぞれの課題に基づく研究発表を行い、その成果を学事研究に反映させていく

ことにある。その趣旨の許、昨年度には何回かの研究会がもたれたが、今年度は各研究員の多忙等もあり、実現しなかった。又、嘱託研究員二氏の研究報告は、依頼をも含めた取り組み体制の遅れもあって実現しなかった。

〈資料整備〉

前年度からの継続作業の経過は次の通りである。

1. 「上首寮日記」第一冊（文政6年～天保6年）を、「真宗学事資料叢書」の『上首寮日記I』として翻刻出版した。又、「上首寮日記」のカード化は、天保7年～嘉永3年まで終了した。
2. 『嚴如上人御一代記』（全11冊のうち松本専成氏により『教化研究』に6冊が翻刻済）の未翻刻分、第五、第八～第十一冊のうち、第十一冊目を除き、翻刻を終了した。『教化研究』に翻刻済の第一～第四冊、第六、第七冊のうち、第一～第四冊は対校を終了した。
3. 「真宗学事資料叢書」所収予定の「条規集」では、学寮時代分を、『校本高倉学寮諸制條類纂』素稿本としてまとめ、簡易製本した。
4. 『中外日報』から大谷派の学事に関わる記事を採録する作業は、昭和4年～昭和6年5月分まで終了した。
5. 解題作成の基礎となる「文献目録」は、『真宗学事研究関係文献目録』（第一版）としてまとめた。

今年度からの新たな作業の経過は次の通りである。

1. 近代学事関係条規の集成は、『宗報』に当り、明治4年～明治34年までの分を収集・整理した。この作業は、今年度『校本高倉学寮諸制条類纂』（素稿本）としてまとめられた近世の条規収集・整理事業を受けて、明治以降の本山学事、大学及び各関連学校の学則の収集・整理を行ったものである。作業は、改変及び僅かな訂正・削除等をも押える意味から、刊行されている『達令集』などには依らず、『宗報』に直接当たった。諸条規は、大学及び各関連学校の性格を明らかにすると共に、本山の学事行政の内容をも明らかにするものである。又、本山学事、各学校等の内容は、政府の文部行政と深い関わりを持っている。その意味で、この作業はまた、文部行政と宗門学事（学校）との関連をも明らかにして行かなくてはならない。これらのことを踏まえれば、作業は

条規の収集・整理に留まらず、宗門学事とその背景、更には政府の文部行政に関する広範な資料等の収集・整理が必要となる。しかし、今年度は当面の作業として、条規の収集・整理作業を行った。更に、当該期の各学校の課業表を収集・整理した。それらの作業は、課業表に示された、各学校の授業内容を明らかにすると共に、学科目と時代思潮との関連をも明らかにするものである。上記の作業に関連して、「学史年表」(文久1年～明治45年)第一次作成を終了した。これは、上記に述べた、本山学事と文部行政等との関連を明らかにする目的で作成した。

2. 学事関係人物資料収集は、曾我・金子問題資料収集の一環として、昭和1年～昭和8年の『真宗』(宗報)にあたり、収集・整理した。この作業は、曾我・金子問題が、宗門の行政上どのように扱われたかを探るものである。しかしその記事は少く、僅かに事実報告と宗議会での質議応答等を収集するに留まった。
3. 大学の学科・講座変遷の跡づけは、大正12年度～昭和41年度までの変遷を一覧表として作成した。この作業は、大学の学科・講座の変遷を跡づけると共に、各学科・講座の名称及び所属の変更をもたらした理由を明らかにして行くための基礎作業である。

資料探訪調査

学寮草創期の資料探訪・歴代三講者関係寺院への調査として、昭和62年3月2日～5日の間、石川県の常德寺、往還寺、富山県の開正寺・真敬寺・円満寺の資料探訪調査を行った(木場・草野研究員、綿谷・宮崎研究補助員)。

<資料検討会>

資料検討会は、以下の通りである。

1. 日時 昭和61年9月25日
発表 「学寮草創関係資料探訪調査報告」
発表者 木場明志研究員
2. 日時 昭和61年10月30日
発表 「校本高倉学寮諸制條類纂」編集報告
発表者 深田虎雄研究補助員

<研究会>

今年度は、諸事情により行われなかった。

海外仏教研究

「海外における仏教研究に関する方法論の研究および文献資料の収集」

嘱託研究員 ロバート F. ローズ

「海外仏教研究」は昭和五十七年度に発足して以来、欧米の仏教学研究の現状を把握することを目的とし、具体的には欧米で発表されている著作・論文の文献目録を作成することを主眼としている。昭和六十一年度は、昨年度と同様、海外における仏教研究に関する方法論に研究テーマを設定し、研究を進めてきた。また文献資料の収集と検討についても過去四年間の実績をふまえて継続してきた。さらに外国の研究者を講師とした研究会も活発に行われた。

<研究例会>

定例の研究会では、研究テーマに即して、海外の著名な研究者を招き、欧米の仏教学の現状や方法論について直接拝聴することができた。

1. 四月十六日
Dr. G. M. Bongard-Levin, Institute of Oriental Studies, Academy of Sciences, USSR
"Buddhist Studies in USSR"
2. 六月三日
Dr. Nathmal Tatia, Director, Jain Vishwa Bharati
"Śraddhā and Jñāna"
3. 六月五日
Dr. John Keenan, Visiting Research Fellow, Nanzan Institute for Religion and Culture
"Intent and Content of Yogācāra Philosophy"
4. 六月二十六日
Dr. David Chappell, University of Hawaii
"Pure Land Sectarianism and Comprehensiveness"
5. 七月十六日
Dr. Mokusen Miyuki, University of California, Northridge; Jungian Psychoanalyst
「念仏の世界性」
6. 十月十六日
Dr. Yoshiro Imaeda, Centre National de la Recherche Scientifique
「ブータンの仏教事情」
7. 十一月四日
Gyomay Kubose, Chicago Buddhist Temple
「現在のアメリカに於ける仏教事情」
8. 十一月十三日

Dr. Thomas Kasulis, Northland College
カスーリス先生をかこむ学術懇談会

9. 十二月十一日

Dr. Jan Van Bragt, Director, Nanzan Institute for
Religion and Culture
「キリスト教から見た真宗」

10. 一月十三日

Dr. Robert Borgen, University of Hawaii
「成尋の『参天台五台山記』—青い目に写った日本人の中国観—」

11. 二月十九日

Dr. Carl Jackson, University of Texas, El Paso
“Asian Influence on American Thought”

12. 三月二十五日

Dr. Michael Hahn, University of Bonn
“On the ‘paracanonical’ translation of Nāgārjuna’s
Ratnāvalī”

以上のように、今年度は十二回の研究会が開催された。これらの研究会を通して、欧米の学者の研究の一端を直接に聴き、意見交換をすることができた。また文献目録作成のための貴重な情報も多く得ることができた。なおこれらの研究会は学外の諸大学・研究所の学者及び京都在住の海外留学生の関心を集め、出席者も増えつつある。このような意味で大谷大学と他の大学や研究機関との交流にはたしている研究会の役割りは毎年大きくなっているようである。

なお Keenan 博士の発表は“The Intent and Structure of Yogācāra Philosophy; Its Relevance for Modern Religious Thought”と題して『研究所紀要』第四号に掲載され、Borgen 博士の発表要旨は“Jōjin’s *San Tendai san Godai san ki*”の題で『研究所所報』第十六号に掲載された。

＜文献目録作成と資料収集について＞

研究会開催と共に本研究の中心的活動のひとつは文献目録の作成である。この文献目録の資料として研究プロジェクト発足当初より欧米諸国の言語で出版されている仏教学の書物や雑誌を積極的に購入してきた。今年度は約300冊を購入し、海仏研の図書室では現在約1,600冊の本と学術雑誌約50種類がある。これらの図書はいうまでもなく仏教学関係のものが中心であるが、仏教学と深く関連のある東洋学・宗教学等の図書も多く所蔵されており、仏教の総合的研究が可能となっている。これらの図書は、本来的には文献目録作成のための資料として収集されたものであるが、海仏研の研究員や大学関係者のみならず、広く学外の研究者にも公開している。このような公開された総合的な仏教学関係の図書室が京都には少ないため、京都在住の海外の研究者などが最近多くおとずれるようになってきている。この点においても海外仏教研究は

大谷大学の国際的交流の窓口として広く貢献している。

文献目録の作成も着々と進められている。図書室が整備されるにしたがい、研究室で直接多くの資料を検討することができるようになった。しかし入手不可能な資料も多くあり、それらを補うために大学図書館、さらには他の大学の図書館に赴き調査した。特に京都大学の人文科学研究所へはウダガマ・スマンガラ研究補助員が十数回赴き、資料を閲覧させていただいた。その結果、文献目録に掲載するデータはかなり充実し、具体的な文献目録作成がようやく可能になる兆しが見えてきたといえる。来年度からは十分検討し、テーマごとに文献目録を作成し、徐々に出版してゆきたいと考えている。

西藏文献研究

「大谷大学所蔵の北京版西藏大蔵経及び蔵外文献の文献研究」

研究員・チーフ 小川 一乗

1. 北京版チベット大蔵経の勘同目録の編纂について

『勘同目録』は、大谷大学図書館所蔵の北京版チベット大蔵経をデルゲ版やナルタン版などの異版と対校し、漢訳、梵文原典のある文献については、その所在を示し、さらに各典籍の題名・章題・著者名・訳者名・校訂者名などの異同を示すとともに、各典籍の奥書を翻訳して研究者の便宜を計ったものである。甘殊爾部(經典部)の目録はすでに戦前に出版されていたが、丹殊爾部(論典部)の目録は昭和40年に第一分冊(I-1)を出版して以来、第六分冊(I-6)までが本学図書館より出版され、さらに第七分冊(II-1)が当研究所より昭和60年に出版された。編纂作業は第八分冊の出版に向けて進行中である。第八分冊には経釈部・唯識部・阿毘達磨部が収録される。

2. 蔵外文献の研究について

大谷大学図書館は、北京版チベット大蔵経とは別に、蔵外文献を四千点以上も所蔵している。これらの文献は、明治以降日本人として初めてチベット入りを果たした寺本婉雅(1872~1940、帰国後本学教授となる)によって北京、青海で蒐集されたものが大部分であるが、それ以外にも、チベット入国の旅の途上、雲南省に消息を断った悲運の大谷派僧、能海寬(1868~1901)のもたらしたものが若干あり、さらに近年になってインド、ブータン等より購入、寄贈されたものも徐々に増えている。近年入手されたものを除く蔵外文献に対する目録は昭和48年に大谷大学図書館より、さらに目録に対する索引も昭和60年に当研究所より出版された。これによってコレクションは学界に公開され、研究者共有の財産となったが、さらに研究者の利用の便を考え、我々は61年度から蔵外文献中に見出される稀観本を影印出版するための準備を

進めてきた。今では各地の多くの蔵外コレクションが知られているが、本学のコレクションは木版による刊本のみならず多くの写本類を含み、その中には他のコレクションには全く見出されない貴重な文献が数十点もあることが確認されている。その中にはモンゴル人の手になる『大唐西域記』のチベット語訳写本、ダルマキールティの『量決訳』に対するサンブ学問寺の学僧ツァンナクパ(12世紀)の註釈の世界唯一の現存写本などがある。以下は我々が選り出した出版予定文献のリストである(当面予定されているもののみ)。

- (1) No.12459 チベット語訳『大唐西域記』(抄本)
- (2) No.13971 『量決訳』の註釈「善釈集」ツァンナクパ作
- (3) No.13949-13954 中観論書
- (4) No.13955-13956 セラ寺教科書(アビサマヤ関係)
- (5) No.13957 セラ寺教科書(『入中論』関係)
- (6) No.13972 サキャ派所伝の『俱舎論』註釈書
- (7) No.13984,13987 ウパローセルの文法書
- (8) No.13983 カラーパの文法書
- (9) No.12460 チベット語による中国仏教史
- (10) No.13981 サンブ学問寺歴代管長記

大蔵経学術用語研究

「浄土教関係典籍における学術用語の総合的研究」

研究補助員 萩原 見俊

本研究は「浄土教関係典籍における学術用語の総合的研究」という研究課題のもとに、『大正新脩大蔵経』全100巻のうち第83巻・第84巻所収の日本撰述浄土教関係典籍(日蓮宗関係典籍を含む)について、正確かつ厳密な解説を通して特に重要な学術用語を選定し、その分類研究を行い、その研究成果を『大正新脩大蔵経索引』第43巻統諸宗部6として出版することを目的としたものである。昭和59年度より当研究所の指定研究(委託研究)として継続されてきたのであるが、本年度は上記の索引出版を昭和61年度末にひかえて、これまでの研究経過をふまえながら、いよいよ出版に向けての最終的な作業を中心に研究を進めてきた。その実際の作業にあたっては、6名の研究員および4名の研究補助員ばかりではなく、多数の学生諸君の甚大なる助力を得たことである。その結果、当初の計画通り文部省の科学研究費「研究成果公開促進費」を得て出版するに至った。

周知のごとく、『大正新脩大蔵経索引』は『大正新脩大蔵経』の手引きとして、仏教研究は勿論のこと東洋文化全般にわたる研究にとって基本的媒介の役割を果たすものである。そこで仏教系六大学によって大蔵経学術用

語研究会が組織され、学術用語の研究を推し進めてきた。

大谷大学では昭和36年以来、既に7冊の索引の刊行を担当してきている。すなわち『大正新脩大蔵経索引・毘曇部下』(37年)、『同・宝積部』(41年)、『同・経集部下』(44年)、『同・史伝部上』(48年)、『同・論疏部2』(52年)、『同・経疏部2』(56年)、『同・統諸宗部2』(59年)の7冊である。8冊目にあたる今回の索引は前回と同様に「日本撰述部」の索引である。しかも今回は日本において特に民衆と深い関わりをもちながら、仏教は勿論のこと文化全般にわたって広く影響を与えた浄土教関係の典籍を中心に扱うものであるから、その有用性は期待をはるかに上回るといえるであろう。それだけに研究発足の当初よりいくつかの問題に直面してきたが、その実際の作業手順としては前回までと大差なく推進できたと思われる。『大正新脩大蔵経索引』は言うまでもなく、音次索引(五十音別索引)・分類項目別索引・検字索引(字面索引・四角号碼索引)からなり、これに収録典籍の解題および凡例を付す。その編纂手順は次の通りである。

- (1) 索引に付すべき用語の選定(線引き)
- (2) 選定された用語のカード化
- (3) 用語の三十項目分類
- (4) 親字の分類
- (5) 親字の読み決定
- (6) 五十音配列
- (7) 音次索引の原稿化
- (8) 分類項目別配列
- (9) 分類項目別索引の原稿化
- (10) 解題・検字索引等の整備
- (11) 出版社へ原稿搬入
- (12) 校正作業
- (13) 出版

今回の索引編纂について、これらの作業を年度順に追ってみると、昭和59年度にはその前年度からの準備をふまえて、まず線引きに着手した。その際、真宗学専攻の大学院生の協力をも得た。線引きが完了して点検した後、直ちにカード化の作業となるが、これには特に多くの熱心な学部生のおしめない協力を得たことである。その結果、年度内にほぼカード化を終え、そのカード枚数は実に約12万枚におよんだ。昭和60年度に入り、学術用語の分類研究を進めた。『大蔵経』に編入された諸典籍には、いわゆる仏教用語は勿論のこと、天文・地理・動物・植物・鉱物・生理・心理・物理・美術など広汎な分野にわたる学術用語が含まれており、『大正新脩大蔵経索引』はこれらの用語を三十項目に分類するものである。分類に際しては、いずれの項目にも配当し難い用語や、数項目に分類が分かれる用語もあったので、テキストに一々の用語を照し合わせながら慎重な検討を重ねた。こうして約12万語の全てに分類を施して後、五十音順に配列すべく親字ごとにカードを並べ替え、その読みを決定

する。本索引は呉音読みを原則としているが、今回扱った『大蔵經』には漢文体・和文体の典籍がそれぞれ編入されている。したがって人名・寺院名・地名等の用語の中には呉音で読むべきでないものがきわめて多く含まれているのである。その点、前回の索引でも同様の問題が指摘されていたが、今回は特に和文体という性格から仮名まじりの用語の読みをどのように処理するかが大きな問題となった。そこで、前回通り一応呉音読みに従って配列し、それ以外の読みをすべき場合は固有名詞に限らず一般的な読みにして配列し、呉音からも検索できるようにした。こうして五十音配列が整えられての後、原稿浄写となる。この作業にも多くの学生諸君の手を借りることができ、作業は順調に進んだ。

今年度はまず出揃った原稿を総点検することから始めた。この段階で問題になったことは原稿量が当初の予定をはるかに越えてしまったことである。そこでもう一度最初から用語の一端を検査し直し、調整をはかった。さらにこれまでも問題になってきた分類項目や配列についても入念なチェックを繰り返し行い、ようやく出版社に搬入するに至った。その後は最終的な校正作業を残すばかりとなり、正確かつ有益な索引を世に送るべく細かな

漢字と数字との校正に没頭し、年度末までに刊行するに至った。

こうして出来上がった『大正新脩大蔵經索引』第43巻続諸宗部6は559ページにわたるものとなった。この索引の完成によって、『大正新脩大蔵經』第83巻・第84巻に収められた8世紀より18世紀までの主要な日本浄土教典籍に関する研究が今後一層進展することが期待される。そのなかには今日現存しない資料も引用文として数多く含まれている。こうした資料の発掘に索引は欠かせないものである。また日本浄土教といっても源空を開祖とする浄土宗各派、親鸞を宗祖とする真宗をはじめとして時宗や融通念仏宗、さらには珍海や源信などの南都・叡山の浄土教などきわめて多岐にわたる。これまでの研究においてもこれら相互の関連性が注目されてきたが、この索引を通じて内外の研究者によってより幅の広い見地から日本浄土教の思想が解明されることになろう。

なお本年度は上記の作業と並行して、来年度以降に予定されている「日本撰述俱舎論関係典籍における学術用語の研究」に向けて研究の準備が進められてきた。この研究は『大正新脩大蔵經』第63巻・第64巻所収の諸典籍における学術用語の研究を行うものである。

〈一般研究〉

昭和61年度「一般研究」研究概要

〈共同研究〉

「オックスフォード運動」の意義とその影響について

研究代表者 多田 稔
本学教授 (英文学)

幸いにして60年度に続き2年目の共同研究に入っていくことのできた本研究の5人の研究者たちが、共通して抱くに至った認識の一端を記し、目下各人がその仕上げを行っているそれぞれの論文の背景を述べ、経過報告とさせていただきます。

オックスフォード運動という極めて包括的で、さまざまな意味でイギリス的といつてよいこの運動の見直しが近年、宗教・政治・歴史・社会学等の分野で盛んに行なわれている。つまりオックスフォード運動というものは、

元来、極めて政治的要素の強かった成立の由来をもつ英国国教会の体制内改革運動であったがため、ジョン・キープルが巡回裁判説教で行った『国民的背教』が出版された1833年7月14日をもってこの運動のはじまりであるという中心人物ジョン・ヘンリー・ニューマンが逐次発刊していった『時局小冊子』1号から90号の間の経過の中には、ヘンリー八世に始まるローマ・カトリック教会からの分離から、1830年代のその時点に至るまでの英国国教会のすべての歴史が含まれていて、この小冊子の刊行と平行して起った諸々の論争は、キリスト教の全貌を呈示し、且つ英国の政治理念の根幹に触れるものとなっているのである。同時に、これはアングリカン・チャーチの唱える中道 (Via Media) による堅実な判断と忍耐強い思索による神の叡知の探求形式という英国史の発展形態でもあった。また、社会的には、産業革命の進展にともない、それ以前より社会の枠組からはずされていた非国教派、カトリック教徒、ユダヤ人たち、そし

て今回の1830年代に至りチャーチスト運動に象徴される疎外されていた下層階級の産業労働者たちの政治・社会へのとり込み方の問題でもあったのである。

すでに18世紀後半には、この運動の予兆ともいべき、同じく国教派の体制内改革であったメソジストたちによる運動がみられたのであるが（メソジストという言葉はオックスフォード大学の学則に定められた学習の方法に厳密に従う人の意）、この運動はウエスリー兄弟の回心体験にもとづくものであり、また賛美歌をうたったりして多分に聴衆の心情的なものに訴えるものであったため、最終的には国教会の枠内に止まりえず、ウエスリーの死後1795年にはメソジストは国教会から分離せざるを得なくなったのである。

また一方、当時のキリスト教会の他方の極には、18世紀の主潮であった理性の尊重にもとづく理神論や合理主義神学があったのである。従って、こうした背景において起ったオックスフォード運動は、その原動力としては約半世紀前のメソジスト運動の勃興と同じ方向性をもった心情に由来し、更にもっと大規模に当時の文学上のロマン主義に触発された中世への回帰の心情を根底に持っていたのである。従って『時局小冊子』第1号では、民衆の意向に左右され世俗にこび、安逸な生活にはしり、下層労働者の物質的欲望をあふりたてる時流の中において、教会のあるべき姿を求め、教会の危機を強く訴えているのである。かくして、腐敗したローマ・カトリック教会とプロテスタント各派の中道を求めていったのである。しかしながら、この普遍的中道が権威の基礎をサクラムメントにおき、そして、いわゆる使徒の継承者にそれを求めるようになった時、ニューマンはローマ教会に接近せざるを得なくなったのである。1841年の『小冊子』90号において、国教会の教義がローマ教会の教義と矛盾なく、ローマ教会はプロテスタント諸派のように国教会にとっては敵なのではなく友人である、と断言した時、ニューマンは国教会を去らねばならなくなったのである。

オックスフォード運動の中心人物がこのようにカトリックに改宗したことにより、この運動を推進していたメンバーの内、国教会に残った人たちでさえも、多分にローマ教会への強い志向を抱くに至ったのである。ジョン・ラスキン、ウィリアム・モリス、マッシュュー・アーノルド等が学んだオックスフォードの雰囲気は察知できよう。

一方、下層階級産業労働者たちを徐々にとりこみキリスト教的社会改革あるいは協同組合など、イギリス的社会発展過程を示す19世紀イギリス社会史は、今世紀に入り、第1次・第2次の大戦を経て、現在の如き福祉型産業社会の構造をもつに至ったのであるが、すべての英国人がその舞台上に登場して主役となった現在において、いわば、近代の出発点であったオックスフォード運動の意

義がさまざまな学界で見直され研究されるに至ったことは当然であろう。

文学の領域においても同じである。最近の19世紀文学の研究熱のたかまはりはそのことを明白に示している。

われわれ5人の研究員は数回の情報交換を行ない、あらし以上のような共通の認識をもち作業に入っている。そうして各研究員はそれぞれニューマン、キープル、ラスキン、アーノルド、カトリック作家たちを中心テーマに据えている。研究費は全額、図書購入と少額の文具費に費やされた。この研究を通して各研究員は今回はそれぞれあらし以上のようなテーマで論文作成することになったが、これを端緒として各研究員の地盤の掘下げが将来行なわれるものと大いに期待される。最後に、この研究を支持して下さった研究所当局へ深く謝意を表わすものである。

＜共同研究＞

東本願寺中国布教史の基礎的研究

研究代表者 木場 明志
本学専任講師 (国史学)

昭和61年4月 研究代表者（国史学）と嘱託研究員（東洋史学）との間で協議を重ね、研究計画申請書に記載した“研究計画・方法”について確認するとともに、それに沿った研究実施・推進のための細部計画や研究員の作業分担について検討を加える。また付随する経費使用の内わけとその効果的使用方法についても打ち合わせ、明治期以降の日中交渉史研究書籍の購入を最優先させることで一致した。できる限り早期に研究員全員による研究打ち合わせ会議をもち、計画・方針について確認の上で具体的に研究活動の開始に入るとする。

同5月22日 研究員全員による研究打ち合わせ会議をもつ。研究代表者より改めて研究方針についての説明を行い、従来の研究に比べての特色、その意義、考えられる問題点などについて討議する。基礎的研究の立場から、史料蒐集作業から始めて積み重ねていくべき旨がまず確認され、日本史系では『配紙』から『宗報』に至る東本願寺側公式資料からの関係記事抜粋作業を、東洋史系では『大清実録』など、中国側史料からの検索、および中国において刊行された日本人仏教会による仏教雑誌からの関係記事抜粋作業に着手することを確認する。また既刊の書籍である『東本願寺上海開教六十年史』『小栗栖香頂略伝』の2冊を、当面の史料とも研究テキストともなり得るものとして指定

し、これを全員が精読することとする。

殊に、史料の見方、取扱いの視点について討議が集まり、東本願寺中国布教を単に肯定的にまたは否定的にみることなく、その歴史的意味あいにも充分歴史の一コマ一コマを見る温かさを欠かさないうちの意見が呈示された。予測される研究結果の一つとして、中国布教が侵略的な様相をもつことが挙げられるであろうことの上からも、貴重な意見とうけとめた。小栗栖香頂をはさんでの楊文会・南条文雄両氏による日中仏教交流の評価も忘れてはならないとの指摘であった。毎週月曜日午後を共同研究日と決定。①日本側史料の蒐集 ②中国側史料の蒐集 ③中国布教史時期区分の検討 ④日中仏教交流史の掘り起し、の4つの作業分担による研究活動に入る。

同6月 研究計画に基づき、第一次の購入予定書籍につき発注。古書籍でしか入手できないものについても東京方面の業者へあてて発注する。

下旬に至って研究代表者病氣入院のため、共同研究会の維持に支障をきたし、当面、大学院学生、アルバイト員による史料の検索抜粋、およびコピーを中心とすることに急遽変更。アルバイト員に作業を依頼し、鋭意進めていくよう指示。

同7月～8月 東本願寺関係史料『配紙』～『宗報』記事検索作業継続。中国布教関係者の任免辞令記事については本学所蔵分に脱落遺漏があるなど、史料的に完全には網羅できないことも判明。

同9月 史料蒐集に中心を置き、11月中に本学所蔵資料からの記事蒐集を終わるように作業を急ぐこととする。また『東本願寺上海開教六十年史』『小栗栖香頂略伝』に基づく諸問題の検討を具体的に開始し、購入書の佐藤三郎著『近代日中交渉史の研究』に示されるような、近代日中外交文書による研究を大幅にとり入れねばならないことが認識され、国立公文書館などの外交文書閲覧の必要性が生ずる状況となった。

同10月 嘱託研究員（東洋史学）が中国仏教石刻遺物調査の目的で中国に赴いたため、北京および上海における東本願寺布教の様子、別院跡地の確認などについて時間のある限り調査するよう依頼。帰国後、聞きとりと写真、地図による報告がなされた。史料整理用ファイルなどの発注を始める。

同11月 『配紙』～『宗報』による明治4年～大正15年の史料蒐集完了。『上海新報』『海外仏教事情』などの新聞・雑誌による記事史料蒐集に重点を移す。また関係書籍の追加購入を急ぐこととする。

外交関係文書の閲覧・蒐集などのため、2名が12月に東京へ出張することとする。

同12月14～15日 嘱託研究員1名東京出張。国立公文書館および国会図書館にて中国側史料を中心とした関係史料の検索、閲覧調査を行う。下旬に後発の調査

者のための予備調査を兼ねる。

同12月16日 史料蒐集状況についての報告会をもつ。中国布教に関連して朝鮮・台湾・樺太布教史料も適宜採集していることが報告される。蒐集史料には大正・昭和期のものも含まれるが、研究課題当該期である明治期史料が順調に集められていることを確認。

同12月21～23日 研究代表者1名東京出張。国立公文書館を中心に明治期日中外交文書を閲覧調査する。昭和62年1月～2月 蒐集した史料の整理方法について検討し、ファイル化・カード化、および最終原稿化、史料保存方法などについて論議する。そしてそれに基づく史料整理作業に入る。

同3月16～19日 研究代表者および嘱託研究員の計2名、山形・東京へ出張。山形へは大谷派寺院所蔵の、初期中国布教に派遣された僧による、明治12～15年の自筆日記の稿本などの蒐集を試みたが、遺憾にも所在不詳にて入手できず残念であった。所在について知るはずの人の近時における神奈川県転住もあって、史料の所在が判明しなかった。東京では日中外交文書の点検を重ねて行なった。

同3月23日 研究概要・研究成果の報告のための総括会議をもち、報告事項および執筆担当者を定める。

同3月27日 経費に関する最終処理を行なう。

これまでの整理段階で総じて報告すれば、従来知られている東本願寺側史料についてはほぼ網羅し、それに別視点を与えてくれる日中外交文書史料を加え、更に仏教界全般の立場による布教事情史料を加えた状況である。それら蒐集史料の分析や活用による、中国布教に関わる諸問題への論及についてはなお時日を要するので、後日の報告に期したい。

<個人研究>

チベット語古典文法学 の研究

研究員 小谷信千代
本学専任講師 (仏教学)

古典チベット語文法の研究は、A. Csoma de Körösを初め、H. A. JäschkeやJ. Bacotなどの西洋の諸学者によって開始され進められてきた。近年に至って、ドイツのM. Hahnが優れた文法書 *Lehrbuch der Klassischen Tibetischen Schriftsprache mit Lesestücken und Glossar, Hamburg 1971* を出版している。我が国に於いても、寺本婉雅、河口慧海などによって研究が始められ、本学の名譽教授、稲葉正就博士によって本格的な文法書

『チベット語古典文法学』、京都、1954（改訂版1966、増補版1986）が著された。しかしこれらの文法書は、西洋人の文法観に基づいていたり、サンスクリット文法を基準にして考えられていたり、あまりにも専門的であったりして、初心者学習のためには些か難解に過ぎるきらいがあると言えよう。

最近チベット人カルサン・ギュルメ (sKal bzang 'gyur med) 氏が出版された文法書 Bod kyi brda sprod rig pa'i khrid rgyun rab gsal me long [蔵文文法教程]、成都、1981は、7世紀に活躍したチベットの偉大な文法学の創始者トンミ・サンボータ (Thon mi sam bho ta) の文法書『三十頌』『性入法』に依りつつ、しかもあまり専門的にならず、初心者にも分かり易く説明されている。この書の特に優れている点は、用例を豊富に挙げていることである。学習者はその用例によって文法規則が実際にどのように使用されるかを具体的に知ることが出来る。それらの用例は、有名な学僧サキャパンデイタの箴言集『サキャレクシエ』(Sa skya legs bshad) や行者ミラレーパの伝記などから採られている。『サキャレクシエ』はチベットでは広く人口に膾炙し親しまれているものである。例えば“巧知姦計も度が過ぎれば、一時は成功しても、いずれは身を滅ぼす。豹の皮を被った口バは、穀物を食った挙げ句、撃ち殺されてしまった。”というような甚だ穿った箴言が随所に見られる。文法を学びつつ、チベット人のウィットにも触れることができ、いささか疎遠なように思っていた言語が身近なものに感じられたりもする。

当初筆者はこのチベット語で書かれた文法書を和訳して紹介したいと考え、協力者の白館氏と共に訳読を行った。しかし、カルサン・ギュルメ氏の説明を忠実に訳していくと、時にはあまりに詳し過ぎて却って繁雑になり、意味が掴みにくくなる場合があり、そのような時には思い切って説明を簡略化した。用例はなるべく多く示したいと思ったが、時間的な制約もあり、適当なものを幾つか選んで掲げることにした。一年間訳読をし整理して一応チベット語文法の教科書として使用できるような形にすることができた。この教科書は『実践チベット語文法—用例を中心として—』という題で本年五月文栄堂書店より出版されることとなった。

本書の文法的な説明に関して多少紹介しておこう。チベット語には dngos po bdag と dngos po gzhan と呼ばれるこの言語に独特の概念がある。通常は略して bdag、gzhan と呼ばれる。これらの概念は、例えば稲葉博士の文法書では、bdag は「自なるもの」とされ、それには (a)能作者 (byed pa po) と、(b)能作 (byed pa) が包摂され、gzhan は「他なるもの」とされ、それには (a)所作者 (bya ba'i yul、所作の対象) と、(b)所作 (bya ba) とが包摂されると考えられ、前者は「能動の語」(byed pa'i tshig) であり、後者は「受動の語」(bya ba'i tshig)

である、とされている (増補版 pp. 147~148)。

それに対してカルサン・ギュルメ氏の文法書では、何らかの行為が行われる場合に、その行為者 (byed pa po) と、行為を行うための手段 (byed pa) と、その現在行われている行為 (byed las da lta ba) との三つが bdag と呼ばれる物事であり、行為の行われる場所 (yul) と、行為の対象 (las kyi dngos po) と、未来の行為 (bya las ma 'ongs pa) との三つが gzhan と呼ばれる物事である、と説かれている。

従ってカルサン・ギュルメ氏に依れば、byed pa'i tshig は「能動の語」を意味するのではなく、現在の動作を意味し、bya ba'i tshig は「受動の語」ではなく未来の動作を意味することになる (『実践チベット語文法』p. 105)。動詞を説明するに当たって bdag-gzhan が説かれるのは、bdag に包摂される物事を表す場合には現在形の動詞を用い、gzhan に包摂される物事を表す場合には未来形の動詞を用いるということを説明せんが為であって、能動か受動かということはその場合の議論の対象にはなっていない。カルサン・ギュルメ氏の説明の方が筋が通るように思える。

〈個人研究〉

「私」の現象学的究明

研究員 池上 哲司
本学助教 (倫理学)

1. 現代英米哲学での人格の同一性をめぐる議論

最初に着手したのは、現代英米哲学を中心とした人格の同一性 (Personal-identity) 関係の文献収集であった。たとえば、以下の如きものである。

Wiggins, D., *Sameness and Substance*, Oxford 1980.
Perry, J., *A Dialogue on Personal Identity*, Indianapolis 1981.

Nozick, R., *Philosophical Explanations*, Cambridge 1981.

Hirsch, E., *The Concept of Identity*, New York 1982.

Parfit, D., *Reasons and Persons*, Oxford 1984.

それと同時に、英米哲学圏ではすでに少数派となっている、自己同一性 (Self-identity) を分析不能なものに求める考え方の代表として R・スウィンバーンの文献を集めた。

Swinburne, R., *The Existence of God*, Oxford 1979.
—, *Faith and Reason*, Oxford 1981.

—, *The Evolution of Soul*, Oxford 1986.

この考え方は、J・バトラー (1692~1752) や T・リー

ド (1710~1796) による J・ロックへの批判に繋がるものである。スウィンバーンは人格の同一性を身体の同一性や脳の同一性に帰することをせず、また人格の同一性を記憶に求めることも否定する。彼の主張の特色は、人格の同一性そのものとその証拠とを区別する点にある。すなわち、人格の同一性は経験的証拠によることなく存在しうるといのである。彼の主張を裏で支えているのは、この私は一人の私であって、脳分割などによって二人の私が生ずるといことは不可能であり、あってはならないという確信であると思われる。この確信は我々にもきわめて受入れやすいものであることに間違いはない。しかし、人格の同一性そのものと同一性の経験的証拠との区別によって、この確信が理論的に明らかにされ根拠付けられているとは残念ながら言いえないのではなからうか。というのは、そもそもその両者の区別が有意味なものかどうかが問われねばならないからである。

人格の同一性をあくまでも理論的に追究して行くなれば、我々はむしろスウィンバーンと対立する人々の考えに傾むかざるをえない様である。すなわち、人格の同一性を人格のいわば実体性に求めることはもはや出来ないとと思われる。すでに J・ロック (1632~1704) にあっては、人格の同一性はその記憶にのみ依存すると考えられたのであり、D・ヒューム (1711~1776) にあって人格は様々な知覚の束ないし集合に過ぎないとされたのである。そして現代の英米哲学者の多くもまた、それぞれに多少のニュアンスの違いがあるにしても、意識の連続性という点に人格の同一性を見ていると言いうる。

なんらかの形で意識の連続性がある初めて我々は人格の同一性を認めることができるというわけである。これは正しい。しかし、この先に問題が生じてくる。それは、スウィンバーンが心配していた様に、脳分割が可能となり、同一の意識が複数の者によって所有されるとき人格の同一性はどの様に考えられるべきかという問題である。これは難問である。いや実は、この問題によってすでに人格の同一性の問題は越えられてしまっているのである。というのは、この事態によって人格の同一性という事柄自体が相対的なものとしてしか意味をもちえなくなっているからである。別の言い方をすれば、これまでの様な硬い概念としての人格の同一性では、現代の医学を始めとする科学技術の進歩によって生み出される事態には対応しきれないからである。更に言うなら、ここで我々は人間とは何かという古くからの、そして究極の間に出会っているのであり、我々のこれまでの人間概念を根底から揺り動かされているのである。

2. 人格の同一性をめぐる別の視点

現代英米に於ける議論を整理する中から、別の視点から人格の同一性を考察するという課題が生じてきた。なぜなら、意識の連続性に人格の同一性を見る限り、その帰結としてこの「私」という固有性——そもそもこの確

信の上に我々は生き、そして様々な問題に立ち向うことができる——が否定されてしまうからである。なるほどこれは一つの確信にすぎない。そしてそうであることによって、スウィンバーンが懐いていた確信となんら変る所はない。したがって、この確信を根拠として人格の同一性について意見を展開することはできない。しかし、この確信を救いうる様な別の視点を理論的に提出しうらば全く問題は無いはずである。

それはどの様に可能であろうか。二つのことが考えられる。(1)意識の連続性が人格の同一性の必要十分条件ではないのではないか。(2)私の固有性ということが人格の同一性をめぐる議論で十分に論ぜられてきていないのではないか。第一の点に関しては、我々の身体性ということの問題にすることができよう。たとえば、私は確かに意識によって私は私であるとするが、意識としての私は決してここに具体的に生きて活動する「私」ではない。というのは、生きるとは我々が世界に働きかけ、同時に世界から働きかけられることであり、ここでは我々の身体性が重要な役割を果しているはずだからである。第二の点に関して言えば、英米のこれまでの議論では問題となっている人格は誰の人格であってもよかった。しかし人格とは一人一人が固有の名前をもっている。そしてこの固有性とまさには他ならぬということであり、そうであることによって人格は他の人格との関係の内初めてその人格でありうるのである。

こうして我々は世界の内では他者との具体的関係を生きる人格の在り方にその同一性——仮にそれがあるとして——の根拠を求めることになるのである。具体的には以下の二つの研究が要請される。(1)ある種の精神病患者によって極端な形で示される他者と私との関係の在り方(→精神医学の場での私-他者関係の研究)。(2)また、他者との関係という場合、そもそも他の人格としての他者は我々にとってどの様な仕方で与えられるのかという他者理解の問題が課題となる(→理解ということを考える手掛としてのデルタイ研究)。

<個人研究>

中国中世における政治 と宗教

研究員 大内 文雄
本学専任講師 (東洋史学)

南北朝末から隋唐初にかけての、およそ6世紀の後半から7世紀前半までの約1世紀間は、戦乱の絶え間なく、それにつれて政治的混乱もまた各地に拡がった時代である。本研究では、この時代の政治と宗教、或いはそれ等

相互の関わりを知ることを目的としたが、その際、或る一定地域における政治的宗教的動向を知ること努めようとした。それは仏教史的側面においても前後の時代を画することになるこの時代の諸相を知る上で、或る限定された地域を基礎に置き、地域的特色の中にそれを見て行こうとする方法が有効ではないかと考えたからである。

本研究において対象とした地域は、現在の湖北・四川の両省である。6、7世紀の間において、この地域の帰趨は、時の政治勢力の動向に大きな影響を与え、従って、主権者もまた目まぐるしく変転した。主権者とは、南朝の梁、及び北朝の西魏・北周、更に隋、唐である。

ところで、湖北の地域に就いては、既に昨年、「6～7世紀における荆州佛教の動向」と題し、主に荆州（現、湖北・江陵）地帯を中心として発表した（大谷学報66-1）。その際、荆州の北方襄陽（現、湖北・襄樊）一帯の動向、及びその西方である巴・蜀の地域の動向に注意する必要を感じ、本研究では、当該地域に関わる史料の収集解説を行った。

この時代を知る史料には数量的制約が常につきまとうものの、基本的なものとしては、先ず唐・道宣の統高僧伝が挙げられる。そこに残されている当該地域に関する記録を複写・カード化して、僧尼の本貫を始めとする、記録に現われた地名・寺院名を摘出し、彼等の当該地域における活動の具体例を把握することとした。また、近年は、従来入手し難かった金石資料が続々と集成されており、本研究でも、そうしたものの一つである石刻史料新編（第三輯）を設備備品として購入し、先ずは当該地域に関わる金石資料の通覧を行った。

更に、本研究の問題である政治との関わりに就いては、特に当時の支配者である梁・西魏・北周・隋・唐による地方支配の実態を知る必要があり、その際、北朝及び隋によって施行された總管制に注目し、正史等を主として、その実態把握に努めた。また、当該地域でも、殊に蜀の地域は道教の淵藪の地でもあり、当時もその勢力は甚だ盛んであった。統高僧伝等の仏教側史料にも、仏教と道教との衝突の様子が屢々表わされており、興味深い記録を提供してくれている。

次に、本研究による成果として、発表を準備しているものに、次の二点がある。

一つは、襄陽地域の仏教史料としての啓法寺碑の解明である。隋の周彪の文、丁道護の書になる書道史上にも著名なこの碑は、既に原石が早くに佚失し、拓本として僅かに一点が伝えられているに過ぎない。書道史料としての評価は、従来様々になされて来ているものの、しかし、その内容等に就いての吟味は左程に行われておらず、今回、碑文の内容の中に、北周武帝の廢仏に関わる仏像破壊の事件が記録され、それが唐・道宣の統高僧伝、道世の法苑珠林の中に少しずつ形を変えながら再録されて

いることを知り得た。襄陽は南方の荆州を扼する戦略上の重要拠点であり、また西魏北周にとっては、自国の領土に組み込んだばかりの新占領地である。啓法寺碑、或いはその内容に関連する諸資料によって、周武廢仏の襄陽地域における実行の有無が確認されると共に、占領行政上の実態の一端をも窺うことができたと考えている。

次に四川地域は、南北朝末において、先に述べた襄陽地域に続いて西魏北周に併合され、その頃新たに施行された總管制により統治された。その際に注意すべきは、在地の有力豪族の動向であって、これ等在地豪族の勢力と支配勢力との交錯は、当該地域の仏教史的動向を知る上にも整理把握しておく必要がある。

さて、この地域は、先にも述べたように、古来道教の優勢な地域であって、統高僧伝等の仏教側史料には、屢々道仏衝突の記録が残されている。一方、新たな支配者となった北周武帝によって、道仏二教の弾圧が実施され、殊に仏教勢力に対する衝撃は大きかったが、四川地域にもその余波は及んだものと思われる。但し、この問題に就いては、史料制約もあり、確認し難い要素も多々ある。この道仏二教の衝突は、隋代をはさんで唐初期にまで持ちこされ、それらの論争の実態は、道宣によって広弘明集等の中に記録されており、そこにも四川出身の僧の名が見えている。また、歴代三宝紀の著者、隋の費長房が益州成都において実際に見聞した僧崖の捨身行等に象徴されるような、実践面において特色づけられる出家者群、或いは唐初において対道教の論陣を張った綿州振響寺の明槃のような護法僧の存在は、いずれも当時の四川地域の特色を、逆に解明する恰好の題材となると考えている。これらの諸問題に就いて、一応のまとめを成すべく、現在、準備を進めている。

かねてより計画されていた『上首寮日記』がこのほど“真宗学事資料叢書”として刊行された。『上首寮日記』は、真宗大谷派の教育機関高倉学寮の上首が記録した日記で、文政六年七月朔日から明治五年十一月二十日にいたる約半世紀に及ぶ記録で、五巻から成っている。このうち第一巻が今回刊行され、今後毎年度毎に一巻ずつ刊行されるはこびになっている。実費にて配布中ですので、ご希望の方は研究所までご連絡下さい。

◁一般研究▷

昭和62年度「一般研究」研究目的紹介

今年度は、『所報』No.16でお知らせしたように、共同研究1件、個人研究5件が推進されている。以下に、それぞれの研究の研究課題およびその研究「目的」を紹介する。

◁共同研究▷

教行信証の基礎的研究

研究代表者 幡谷 明
 本学教授 (真宗学)

『教行信証』の研究は、『親鸞聖人真蹟集成』第一・二巻が出版（昭和48・49年）されて以来厳密な学問的研究が行なわれるようになってきた。しかし、一般の『教行信証』の学習・研究においては、坂東本を底本とする『定本親鸞聖人全集』第一巻が基本テキストとして依用されている。このテキストは、昭和33年4月に出版されたものであり、既に30年を経ており、校異・誤植等を含めて多くの問題を抱えているのが実情である。今日では『教行信証』3本の完璧な影印本（坂東本・専修寺本・西本願寺本）も出版されており、それに基づく研究成果も十分にあげられている以上早急に書誌学的・文献学的研究業績を十分に踏まえた新しいテキストが作成されることが強く要望されている。

当研究班では、過去2年間に亘って、テキスト作成に向けての基礎的研究も行い、既に『教行信証』の中でも

最も問題点の多い「化身土末巻」のテキストを作成し、それに関連する資料蒐集、科文研究、雑誌論文目録等の作業を行ってきた。今までの研究成果については、既にその一部が『研究所紀要』第4号に掲載されており、テキスト（「化身土末巻」）及び科文、文献目録等については、別冊の形で公表される運びになっている。

本年は、それらに基いて、更に「教」・「行」二巻の作成を目指し、その為の基礎的研究及びテキスト作成を行うことを目的としている。研究計画・方法は、次のような形で行う。

- [A] 『教行信証』「教」・「行」二巻のテキスト作成
- (1) 坂東本を字体・字数・行数等の全てを真蹟本の形態通りに原稿化する。そして『真蹟集成』の丹山本による朱点と丹山本との照合を兼ねて行う。
 - (2) それを他の2本の影印本と照合・校訂を行う。
 - (3) 更に、諸版本（寛永本、正保本、明暦本、寛文九年本、寛文十三年本）との校異を行う。それには東本願寺・西本願寺出版の聖典との校異を含む。
- [B] それと共に、『教行信証』の引用文を大正大蔵經の諸経論釈文と照合し、その問題点を明確にする。

以上の様に二班に分け、四事項を中心に研究を進める予定である。

◁個人研究▷

歎異抄のチベット語訳 のための研究

研究員 白館 戒雲
 本学専任講師 (仏教学)

日本では近年特にチベット仏教に対する関心が深まり、チベット仏教の特質も以前に比べるとはるかによく理解されるようになった。それに対してチベットでは、日本の仏教は殆んど知られていない、と言っても過言ではない。私はかつて、そのような状況を憂えて、日本仏教の紹介書をチベット文で著わしたことがある (Nyi hong chos 'byung phyogs bsdus、国際仏教徒協会、1977)。

この書を出版するに際して日本仏教を学んでいた時に、『歎異抄』の持っている近代的な精神に強く関心をひかれた。親鸞聖人が非僧非俗の生活をし、また「弟子一人も持たずそうろう」と言われたことは、私がそれまで想像もしていなかった、新しい仏教の学び方を私に示してくれるものであった。最近ではチベットの青年たちの一部は仏教に対する関心を失いがちである。その一つの理由は、チベットの仏教が現代社会の状況から遠く離れていることにあるのではないかと考えられる。このような時に、親鸞聖人の思想が紹介されれば、若者たちを仏教にひき戻す一つの契機になるのではないかと、思われる。また、チベット仏教を習熟している学者たちには、仏教の別な一面を知るよい機会になると思われる。

以上のような理由で、日本仏教の優れた成果である『歎異抄』をチベット語に翻訳したいと思うのである。

<個人研究>

日本僧伝文学の研究

研究員 石橋 義秀
 本学助教授 (国文学)

<研究目的>

日本の僧伝文学は、古代・中世・近世を通じて大きな流れをなしており、仏教文学の世界においても無視できない重要な研究対象である。しかし、今日まで僧伝文学について本格的に研究した著書は無く、仏教文学や仏教説話等の研究書に付随的にその研究が散見するに過ぎない。つまり、古代や中世の僧伝文学の一部(鑑真・行基・最澄・空海・源信・法然・親鸞等の伝記、いわゆる高僧伝)については、歴史学や仏教学の立場から研究が進められているが、国文学の立場からの研究は殆んど見られない。

研究申請者(石橋)は、これまで主として古代の仏教

説話や往生伝類を研究してきたが、一方、僧伝・僧伝文学に関心を持ち、研究課題の一つと考えてきた。今回、僧伝文学について、具体的な作品を取り上げて吟味・検討し、当該研究課題(非常に大きなテーマであるが)の基礎的研究を行ないたい。

今年度内に明らかにしようとする点は、(1)主として、中世から近世にかけての僧伝文学についての現在の研究状況を踏まえ、未開拓の作品(個人伝・集成僧伝)をいくつか選び出し、先ずその書誌・文献の面を考究する。(2)その上で、各作品の文芸性・思想性等について考察したい。但し、数多い僧伝文学<中世・近世>作品群の中から、どれを取り上げるかは、検討中であるが、未開拓のもので、注意すべき作品として、例えば『扶桑寄帰往生伝』・『古今往生略伝』・『女人往生伝』などが考えられる。

日本の僧伝文学については、さまざまな問題点や課題があるが、国文学の立場から検討を加え、最終的には、日本僧伝文学について系統的な位置づけをしなければならないと考えている。

<個人研究>

知識社会学の成立に関する研究

研究員 千葉 芳夫
 本学専任講師 (社会学)

本研究は、知識社会学の初発的問題意識を明らかにすることを目的とする。

知識社会学は、1920年代のドイツにおいて、M・シェーラーを創始者とし、K・マンハイムによって確立された研究領域である。

従来、社会学においては、マンハイムの知識社会学の、しかもイデオロギー論としての側面に、主に関心が向けられてきた。だが、1960年代に、シュッツ、バーガー、ルックマン等の現象学に基礎を置く知識社会学が出現し、その影響を受けて、シェーラーやマンハイムの学説を現象学的、あるいは解釈学的視点から検討しようとする動きが、最近現われている。

シモンズ、パウマン、ヘックマンといった人達のこのような研究によって、シェーラー、マンハイムの知識社会学についての理解が深まったことには、疑問の余地はない。だが、彼等には、シェーラーやマンハイムを、現代の現象学や解釈学の立場に引き寄せて解釈しようとする傾向がみられる。シェーラーやマンハイムを知識社会学へと向かわせた問題関心は、どのようなものだったのか。又、それはなぜ、社会学でなければならなかったのか。このような点は、彼等の研究によっても、必ずしも明確

にはなっていない。

このような研究状況を顧みるとき、今一度知識社会学の成立期に立ち帰り、その中心の問題の全体的連関を把握することが必要と思われる。そのためには、当時の思想的・学問的動向との関連を探究することが不可欠であろう。

さしあたっての、より具体的な研究課題としては、(1)精神科学の潮流と知識社会学との関連、(2)形式社会学と知識社会学との関係、(3)シェーラーとマンハイムとの問題関心、及び問題へのアプローチの仕方の同異、といったものを挙げることができる。

この研究は、これらの問題のうち、世界観概念に焦点を置いて、ディルタイを中心とする精神科学の潮流と知識社会学との関連、更に、世界観問題に対する、シェーラーとマンハイムとの問題関心の差異を究明しようとするものである。

＜個人研究＞

近代大谷派教団社会事業の研究

研究員 佐賀枝夏文
 本学専任講師 (社会福祉)

社会事業の成立は社会の動向、状況を反映するところが大きく、それぞれの社会事業の内容には、それにかかわる人間の表情のようなものがうかがわれる。あるものは民衆の悲しみ、苦しみなどの生活感情を露わにし、またあるものは人間が寄添って生きている温もりをほのほのと感じさせるといった具合である。同様に援助活動を行なう側にも、それぞれ独得の表情があるように思われる。

社会事業の源初においては、民間人が取り組んだものが多く、とりわけ草創期、資力の限りを投入し、身を挺して実践された、先輩諸氏の姿は、まさに菩薩道を具現化して生きたとさえいえるほどである。社会事業が成り立つ過程を時間の流れの中でみてみると、時代の流れの中で所期の目的を達成し消えていったもの、時代とその要請に応じて、質の転換を行ない残ったもの、法制化さ

れ体裁を整えて制度として成立したものと様々である。

ところで近代大谷派教団の歩みのなかにあっても、数多くの社会事業への実践的な取り組みが見出される。大正10年1月、社会事業調査会の設立を機に、各宗派社会事業当局協議会が結成された。大谷派教団にあっては、同年2月に他の諸宗派、関係行政機関の最先端を切って、本山機構内に社会事業講習所開設の為の規定を制定し、社会事業講習所開設へ第一歩を記しているのである。同講習所は日本の社会事業史、社会事業教育史としては最も古く、かつ重要な役割を担った教育機関であった。

本研究は大谷派教団の社会事業史、社会事業教育史の源流と思われる同講習所の事業の発掘を目的として、それらに関する一連の資料の蒐集、ならびに同講習所の修了生の動向調査を目的とする。

福祉実践へ身を投じられた先輩諸氏、同輩、それに続く後輩諸君の実践を、そして心境を支えているのは、学びの場としての大谷大学、育ちのなかの真宗にほかならない。実践活動への参加の動機を同じくするものとして、よって立つところを同じくするものとして、同じ展望を共有するものとして、あえて命名するならば真宗実践福祉のルーツを発掘し、これを契機に、真宗実践福祉の実践のあり方と、理論構築の作業に取り組みたいと思うところである。

＜個人研究＞

近畿における重力探査データのコンパイル

研究員 西田 潤一
 本学助教授 (物理地質学)

近畿地方における重力探査データは様々な研究機関で行われ、個別に論文ないし卒論の形で発表されている。重力データは地下の密度分布を反映するために、地下構造を推定する手掛りとなるものであるために、これらを整理統合して広域重力図を作ることが近年の第4紀地殻変動論の立場から要請されている。

このような整理統合を行う際に問題となることは、1971年の国際測地委員会の決議によって絶対重力値の表示がそれまでのポツダム系から1971年系へ移行したことにより、旧データがポツダム系のまま取り残されていることである。これらのデータは全て1971年系へと再計算することが必要である。次に重力値には近傍の複雑な地形による引力の影響があるために、これを補正計算する必要がある。この補正計算は国土地理院の地形データK S 110-1を利用して、大型計算機を用いて行うことが可能になっているので(桂・西田・西村、物理探査第40巻)、既存データにその補正値を加える予定である。

筆者はこの十年近江盆地を中心とする重力探査データを蓄積してきたので、そのデータを中心として周縁部にデータのコンパイルを進めてゆく予定である。現在予定しているのは、近江盆地から始めて京都盆地、大阪平野のデータをコンパイルする予定である。

重力データは測定値の緯度、経度、海拔高度及び絶対重力値より成り立つ。古いデータでは緯度、経度の与えられていないケースがあるが、これらは原データに戻って復元する予定である。次にこれらのデータには使用重力計、測定年度、参考文献を付け加える。これらのデータを国土地理院の二万五千分の一地形図毎に整理する。なお二万五千分の一地形図は先に述べたK S 110-1の二次メッシュコードに対応する。これらに地形補正値を密度 1.0 g/cm^3 で計算した値を加えておく。こうすることにより、任意の密度でのブーゲー異常値を計算することが可能になる。このような作業を行うことから、厚い堆積層に覆われた近江盆地や大阪平野下の活断層の存在を示すことができると考えられる。また広域異常のパターンから近畿地方の地殻に働くフィリピン海プレートの影響をも推定することができると期待できる。

研究所報 第17号

1987年6月30日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603 京都市北区小山上総町